

中国農村部における労働力輸出の実態 寧夏回族自治区東部灌漑区の都市近郊農村を対象に

柴畑恭介・伊藤勝久（島根大）

研究の背景・目的

中国農村部の余剰労働力を存分に使って発展を続けてきた中国であるが、蔡昉によると農村の余剰労働力の増加分が2010年までに新たな労働力需要を下回る可能性がある(1)。また今後、労働力の移出に際し、農村機能の維持に対しても注意を払わなければならないと思われる。

これまでの中国の労働力移動についての研究、とくに「農民工」と呼ばれる農業戸籍をもつ農外就労者に対する研究は、主に需要側である都市において調査されたものである(2)。また、農村で行われた研究は貧困からの脱出のみが重要視され、農業から農外への就労移動を所得によって一面的にとらえているものが多い(3)。また中国では緩和されてきてはいるものの、自由な戸籍移動が制限されており、戸籍や統計が居住状況を正しく反映しているとは言いがたい。

本報告では、今後中国における労働力の主要供給地となる西部地域に位置する地方都市呉忠市近郊の河渠澗村において、現在農村に居住している農民側からの視点で就業移動をとらえ、農外就業の実態と位置づけを明らかにすることを目的とする。また同時に農業・農村に対する居住者の意識を重ねることで、農村の将来の姿に迫りたい。

調査

調査対象の河渠澗村は、寧夏回族自治区の省都から高速バスで約一時間の呉忠市近郊に位置し、市中心部から路線バスで20分ほどである。塞上江南と呼ばれる比較的肥沃な平野にある。

2008年の8月に50戸の農家から世帯各人の農外就業経験・意識についての聞き取り調査を行った。その際、外部居住も含めた農民工の多様な形態をとらえるため、基本的には同一戸籍の構成員を一つの農家としてとらえた。

調査結果

日本においては、「農民工」という言葉がしばしば「出稼ぎ労働者」と誤訳されている。そのため「出稼ぎ」という言葉から大都市への季節移動という就労形態が連想され、恒久的な離村、在村就労も含まれる多種多様な就業移動であることが見落とされている節がある。

本村では周辺の小都市部での就労の場合通勤兼業が可能であり、離村就労は少なかった。通年・季節的就労ともに正規職員としてではなく臨時職員としての就労がほとんどである。また現金所得は圧倒的に農外就労で得ている世帯でも、現時点では農業は食糧の確保、生活の保障として続けようという意思が生きている。そのため農外就労は農業に代わる生計手段ではなく、臨時的現金の獲得手段として位置づけている世帯が多い。しかし、後継者に関しては大多数が離農を望んでいる。本農村は比較的恵まれた土地条件であるが、日本の高度経済成長初期と似た状況が見られ、過疎・高齢化が進むことも考えねばならないと思われる。

(1) 蔡昉 中国経済的転換及其对発展和改革的挑戰 中国社会科学 2007

(3)例えば、巖善平 農民工問題の諸相 『東亜』2007年3月号 pp72-83

(3)例えば 國務院研究室課題組 中国農民工調研報告 2006 中国言実出版社

(連絡先: 柴畑恭介 todokyoro@yahoo.co.jp)